

令和３年度全国学力・学習状況調査 小田原市の結果について

小田原市教育委員会

目 次

１ はじめに

２ 調査の概要

- （１）調査の目的
- （２）調査の方式
- （３）調査の実施日および調査の対象
- （４）調査の内容
- （５）調査結果の見方
- （６）本市の基本的な考え

３ 各教科の平均正答率

- （１）令和３年度 各教科の平均正答率一覧

４ 調査結果のポイント

- （１）主な成果について
- （２）主な課題について
- （３）質問紙調査について

1 はじめに

令和3年5月に実施された「令和3年度 全国学力・学習状況調査」の本市の調査結果の概要についてお知らせします。本市の調査結果及び課題等を公表することにより、学校・家庭・地域がより一層の連携をし、本調査から見える児童生徒の学力や学習状況から学習指導の改善に努めていきたいと考えています。

なお、令和2年度に新型コロナウイルスの影響による臨時休業が行われたこと、学校再開後も感染対策を講じた上での教育活動となったことは、児童生徒の学力や学習状況にも影響を与えた可能性があります。令和元年度調査までの経年変化を捉える際には、単純な数値の増減のみでは比較できない場合があることも踏まえながら、本調査の結果を活用し、児童生徒への指導を充実させていく必要があると考えています。

また、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であることや、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、結果については、序列化や過度な競争につながらないように十分配慮して取り扱う必要があります。従って、本内容を活用の際にはこの趣旨を十分ご理解いただき、適切な取扱いをされますようお願いいたします。

2 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の方式

悉皆調査

参考	・平成19～21年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	・平成22年度	抽出調査	国語、算数・数学
	・平成24年度	抽出調査	国語、算数・数学、理科
	・平成25・26年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	・平成27年度	悉皆調査	国語、算数・数学、理科
	・平成28・29年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	・平成30年度	悉皆調査	国語、算数・数学、理科
	・平成31年度(令和元年度)	悉皆調査	国語、算数・数学、 英語(中学校のみ)
	・令和3年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	※ 平成23年度は東日本大震災のため予定していた抽出調査を中止		
	※ 令和2年度は新型コロナウイルスのため悉皆調査を中止		

(3) 調査の実施日および調査の対象

令和3年5月27日(木)

- ・小学校第6学年(市内25校、約1,400名 内1校は後日実施)
- ・中学校第3学年(市内11校、約1,300名)

(4) 調査の内容

① 教科に関する調査

- ・小学校・・・国語、算数
- ・中学校・・・国語、数学

② 質問紙調査

- ・児童生徒に対する調査
- ・学校に対する調査

(5) 調査結果の見方

本調査の結果で示されている平均正答率については、文部科学省の考え方に準じて整理している。

「全国学力・学習状況調査 報告書」(国立教育政策研究所)では「平均正答率の±10%の範囲内にあり、大きな差は見られない」としており、小田原市でも「平均正答率の±10%」を目安としながら調査結果を整理した。

(参考)

各都道府県・指定都市(公立)の状況については、平均正答率を見ると、全ての都道府県・指定都市が**平均正答率の±10%の範囲内にあり、大きな差は見られない。**

出典:「令和3年度 全国学力・学習状況調査 報告書」(令和3年8月 国立教育政策研究所)

(6) 本市の基本的な考え

小田原市教育委員会では、本調査の結果について次のような考えを基本としている。

本調査で測定できるのは「学力の特定の一部」であり、地域性や家庭環境等による影響も受けるものと認識しているが、調査問題は、学習指導要領の目標・内容等に基づいて作成されたものであり、その結果は、児童生徒の学力の一側面を示す客観的な資料である。

3 各教科の平均正答率

(1) 令和3年度 各教科の平均正答率一覧(単位は%)

	教科	小田原市	神奈川県	全国
小学校	国語	58	63	64.7
	算数	66	70	70.2
中学校	国語	63	65	64.6
	数学	56	58	57.2

※市や県の正答率は整数表示

○小田原市の平均正答率は、「全国平均正答率±10%」の範囲内に全教科が含まれており、全国との大きな差は見られない。

小学校算数は前回調査よりも全国平均正答率との差がやや大きくなったものの、小学校国語、中学校国語、数学は全国平均正答率との差が小さくなった。今後も小学校・中学校ともに学習指導要領の示す資質・能力をしっかりと身につけていくことが大切である。

4 調査結果のポイント

(1) 主な成果について

【成果 1】 小学校・中学校ともに国語の学力が改善

○平成 31 年度（令和元年度）の調査において、小田原市の【課題 1】として「国語の漢字の定着・言語の力」を、【課題 2】として「小学校国語の話すこと・聞くこと」を挙げている。今回の調査では、**小学校・中学校ともに国語の全国平均との差が縮まっている。**

＜国語の調査における全国平均との差＞（数値は全国平均との差）

	平成 31 年度（令和元年度）	令和 3 年度
小学校	－7.8 ポイント	－6.7 ポイント
中学校	－1.7 ポイント	－1.6 ポイント

○特に小学校国語「話すこと・聞くこと」では、前回調査の－11.0 ポイントから、－3.3 ポイントと全国平均との差が縮まっており、改善の傾向がみられる。

＜小学校国語の「話すこと・聞くこと」に関する設問の結果＞

（数値は平均正答率、単位は％）

設 問	小田原市	全 国
目的に応じ、話の内容が明確になるようにスピーチの構成を考える	73.8	77.5
資料を用いた目的を明確にする	71.0	74.9
目的や意図に応じ、資料を使って話す	78.8	81.0
平均	74.5	77.8

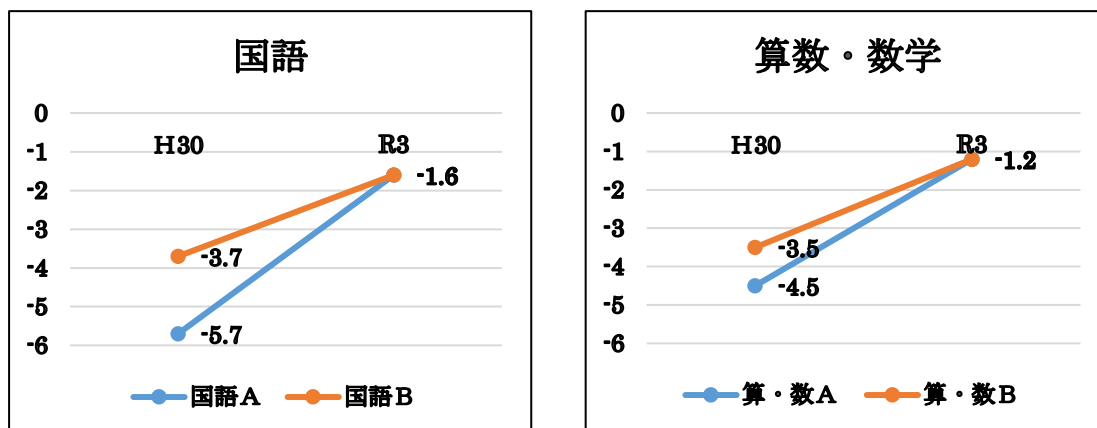
○また、中学校国語の「言語」についても前回調査の－3.8 ポイントから、－2.2 ポイントと全国平均との差が縮まっており、改善の傾向がみられる。

＜中学校国語の「言語」に関する設問の結果＞（数値は平均正答率、単位は％）

設 問	小田原市	全 国
文脈に即して漢字を正しく読む（ <u>伸ばして</u> ）	97.2	97.5
文脈に即して漢字を正しく読む（ <u>詳細</u> ）	87.1	88.8
事象や行為などを表す多様な語句について理解する	70.5	74.0
相手や場に応じて敬語を適切に使う	36.9	40.3
平均	72.9	75.1

各学校では、自校の全国学力・学習状況調査の分析をもとに、「学力の向上」に向けた取組が行われている。家庭学習や朝の時間、また、授業の始まるの時間などに、課題に計画的・継続的に取り組むなど、指導の工夫・改善の成果が現れている。

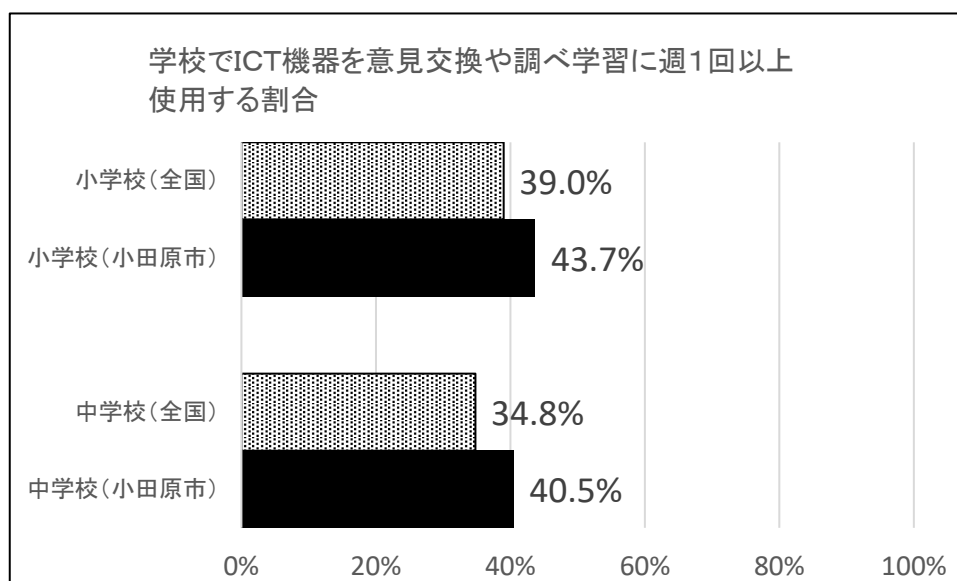
【成果 2】令和 3 年度の中学 3 年生は、3 年間で平均正答率が向上



○令和 3 年度の中学校 3 年生の結果を、平成 30 年度の小学校 6 年生の結果と比較し、同じ集団の 3 年後の変化を見ると、全国平均との差がー 3 ポイント～ー 6 ポイント程度あったものが、国語・数学ともに差が縮まっている。

本市では小学校 6 年生から中学 3 年生への学力の変化をみると、調査平均正答率の向上が継続して見られている。今年度も、各学校で行っている指導方法等に関する研究や各中学校区を単位に行っている小中合同の研究会での取組の積み重ねが成果として現れている。

【成果 3】I C T 機器の活用



○「あなたは学校で、コンピュータなどの I C T 機器を、他の友達（生徒）と意見を交換したり、調べたりするために、どの程度使用していますか。」という質問事項に対する回答では、小学校で 4.7 ポイント、中学校で 5.7 ポイント全国平均を上回った。

国の G I G A スクール構想により児童生徒 1 人 1 台の学習用端末が整備されたが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、本市では学習用端末の一部やアプリケーションを前倒しで導入し、各学校や家庭で I C T を活用した学習ができるようにした。I C T 機器を意見交換や調べ学習に活用している児童生徒が多いのは、その成果が表れているものと考えられる。令和 3 年度 4 月から学習ネットワークの本格運用が始まっているが、引き続き I C T を活用した教育の充実を図っていきたい。

(2) 主な課題について

【課題 1】小学校国語の学力向上

○小学校国語では、改善傾向は見られるものの、継続して全国平均を5ポイント以上下回る状況である。領域別に見ても、「話すこと・聞くこと」以外の領域は5ポイント以上下回っている。

＜小学校 国語＞（数値は平均正答率、単位は％）

領 域	小田原市	全 国
話すこと・聞くこと	74.6	77.8
書くこと	52.1	60.7
読むこと	42.8	47.2
言語の特徴や使い方に関する事項	60.0	68.3

○小学校において、漢字を文の中で正しく使ったり、文脈に即して漢字を正しく書いたりすることについて継続して全国平均を下回っている。

＜小学校国語 言語に関する設問＞（数値は平均正答率、単位は％）

設 問	小田原市	全 国
学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う (ころがっている)	63.0	78.3
学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う (つみ重ねる)	43.8	54.4
学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使う (げんいん)	71.0	79.0
平均	59.3	70.6

漢字に関しては、昨年度までと同様「漢字を書き、文や文章の中で使うこと」に課題が見られた。漢字は日常生活の中で適切に使うことができるようにすることが大切であり、ノートに何度も書くだけでなく、漢字の意味をしっかりと理解したり、前後に用いられている言葉や文脈に合った漢字を書いたりするなどの学習の積み重ねが必要である。特に同音異義語については漢字辞典を使って意味を調べたり、同音異義語を使い分けた短文作りをしたりする学習などを取り入れていくとよい。

また、国語の力を高めていくためには、読書に親しみ、内容の全体を捉えながら、自分の感想や考えをもち、それらを文章で表現することも有効である。

【課題２】算数・数学の図形領域

○算数・数学の領域別平均正答率を見ると、小学校、中学校ともに「図形」領域が一番全国平均との差が大きくなっている。

＜小学校算数 図形領域の設問＞（数値は平均正答率、単位は％）

設 問	小田原市	全 国
三角形の面積の求め方について理解している	47.1	55.1
複数の図形を組み合わせた図形の面積について、量の保存性や量の加法性を基に捉え、比べることができる	70.5	72.5
複数の図形を組み合わせた平行四辺形について、図形を構成する要素などに着目し、図形の構成の仕方を捉えて、面積の求め方と答えを記述できる	39.6	46.0
平均	52.4	57.9

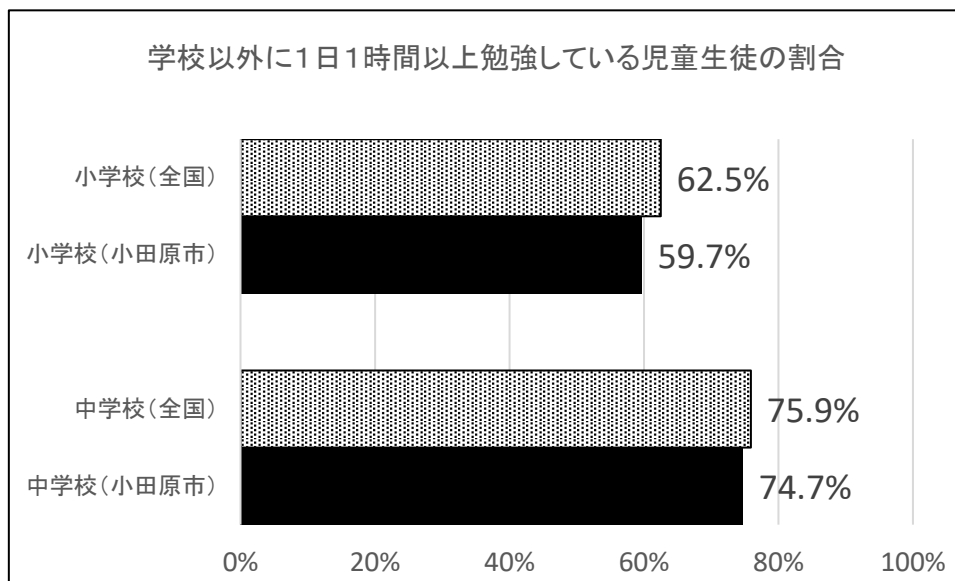
＜中学校数学 図形領域の設問＞（数値は平均正答率、単位は％）

設 問	小田原市	全 国
扇形の中心角と弧の長さや面積との関係について理解している	65.8	68.1
平行四辺形になるための条件を用いて、四角形が平行四辺形になることの理由を説明することができる	40.6	44.3
錯覚が等しくなるための、2直線の位置関係を理解している	60.8	64.3
ある条件の下で、いつでも成り立つ図形の性質を見いだし、それを数学的に表現することができる	30.0	28.8
平均	49.3	51.4

図形の学習では、観察や構成などの活動を通して、図形を構成する要素などに着目して捉え、図形の計量について筋道を立てて説明することが重要である。そのために例えば、三角形や平行四辺形の底辺と高さの関係の理解を確実にし、図形を構成する要素などに着目して、基本図形の面積を求める公式の理解を深め、活用できるようにすることなどが有効である。

また、図形の性質を考察する場面では、予想した事柄が成り立つ理由を筋道立てて考えることや、条件を保ったまま図形を動かしても成り立つ事柄を見いだすことが大切である。

【課題 3】 家庭学習の定着



- 「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」という質問事項では、平成31年度に初めて小学校、中学校ともに全国平均を上回ったが、令和3年度調査では再び下回っている。

「家庭学習の時間」については、これまで各学校での取組が結果として表れ、継続して改善してきたが、今年度は再び全国平均を下回った状況である。

小学校においては、前回調査の本市の結果は 66.3%だったのが、59.7%と減少している。全国平均も前回調査より 3.6 ポイント減少している。

中学校においては、前回調査の本市の結果は 69.9%だったのが、74.7%と伸びているが、全国平均の伸びには及ばなかった。

これは、児童に対して家庭学習の声かけが減少するなど、新型コロナウイルス感染症による臨時休業等の影響がでたものと考えている。また、中学校においては、増加した家庭で過ごす時間が学習に生かされていることが考えられる。また、今回の調査から、設問に「インターネットを活用して学ぶ時間も含む」という補足が加わっている。ICTの活用が影響していることも考えられる。

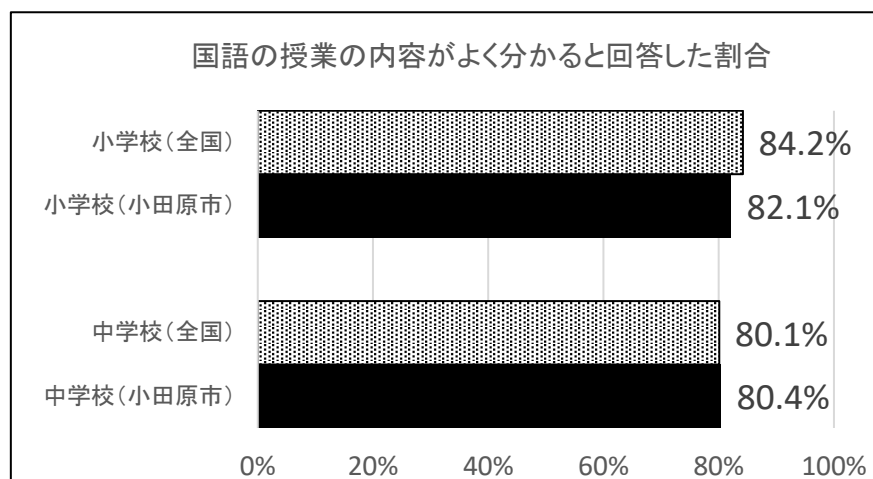
家庭学習の定着は児童生徒の学力向上につながることから、継続して家庭への啓発に努めていきたい。

(3) 質問紙調査について

クロス集計により教科に関する調査と相関関係のあることがわかっている質問紙調査の項目について、その一部を全国の状況と比べながら分析した。これらの項目に肯定的な回答をした児童生徒を増やしていくことで、教科の調査結果も向上していくと考えられる。

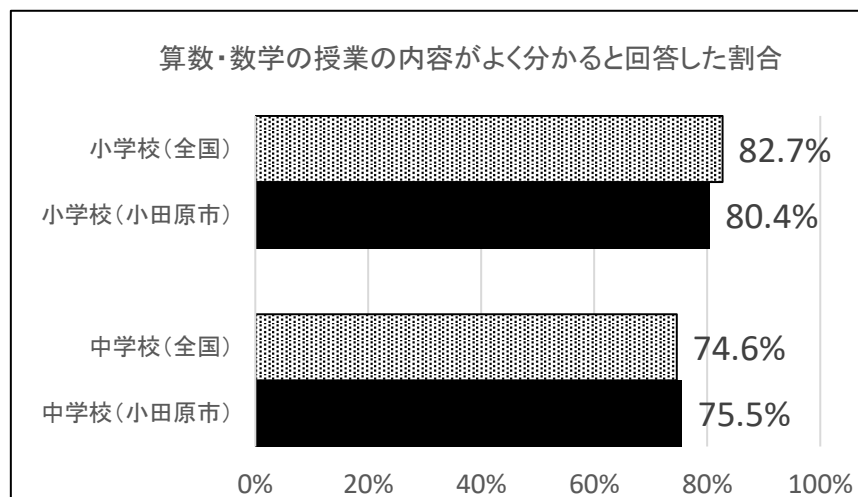
【質問紙１】「国語の授業内容がよくわかる」

○小学校、中学校ともに「国語の授業内容はよく分かりますか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合



【質問紙２】「算数・数学の授業内容がよくわかる」

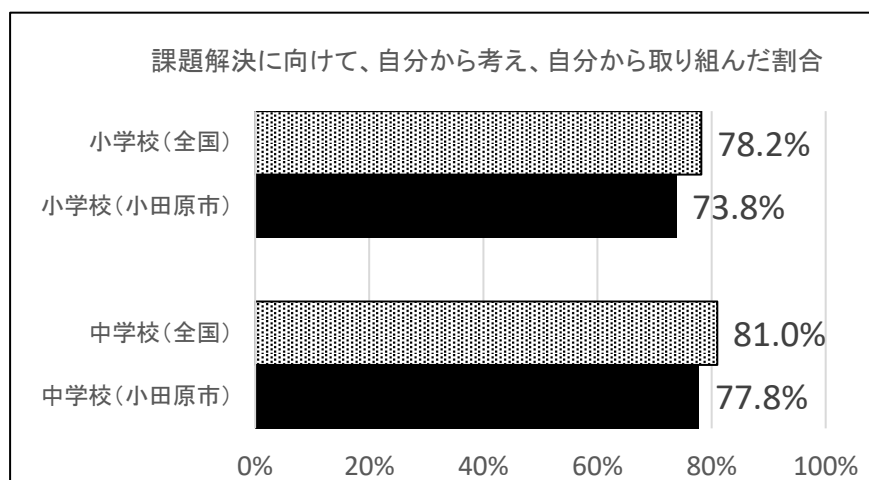
○小学校、中学校ともに「算数・数学の授業の内容はよく分かりますか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合



国語、算数・数学ともに、授業の内容がよく分かると回答した割合は、小学校・中学校ともに全国平均とほぼ同じであり、中学校ではやや上回った。児童生徒が自分の理解を確かめながら学習を進めていくことは、学習内容の定着にもつながっていく。授業の中で学習活動の見通しをもつ時間や、振り返りの時間を設けるなど、児童生徒が主体的に学ぶことができるようにすることが大切である。

【質問紙３】「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」

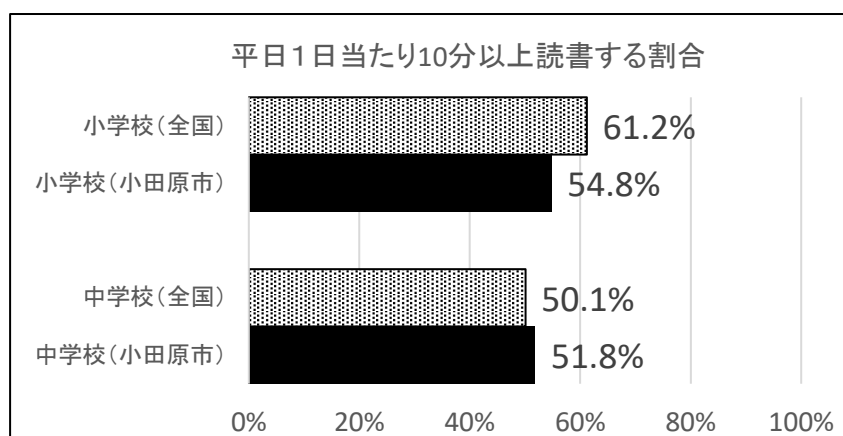
○小学校、中学校ともに「前学年までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答した児童生徒の割合



課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組もうとする児童生徒の割合は全国平均をやや下回る結果であった。自分の考えをもち、主体的に課題に取り組むことは大変重要である。今後も、学習指導要領の趣旨を踏まえ、児童生徒一人ひとりが自ら問いを見出し、その解決に向けて知識や技能を活用し、学びを深めることを大切にしたい質の高い授業を目指していくことが大切である。

【質問紙４】「日常的に読書をする」

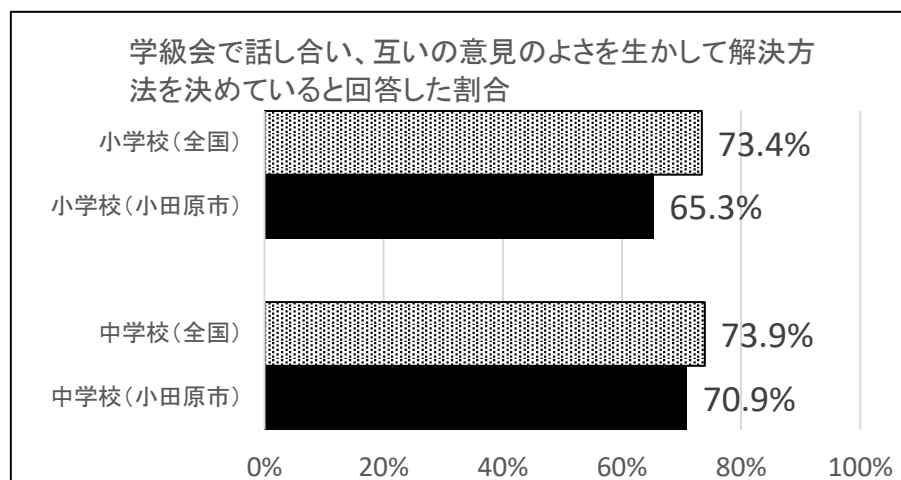
○小学校、中学校ともに「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、読書をしますか。（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」という質問事項で「10分以上」と回答した児童生徒の割合



読書を日常的にするという児童生徒の割合は小学校では全国平均を下回り、中学校では上回る結果だった。日常的に本に親しむことは、国語の力のもとになるとともに、様々な世界や考え方に触れることにつながる。児童生徒が進んで本に親しめるよう、環境を整えたり、声かけをしたりしていくことが重要である。

【質問紙５】「学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を 決めている」

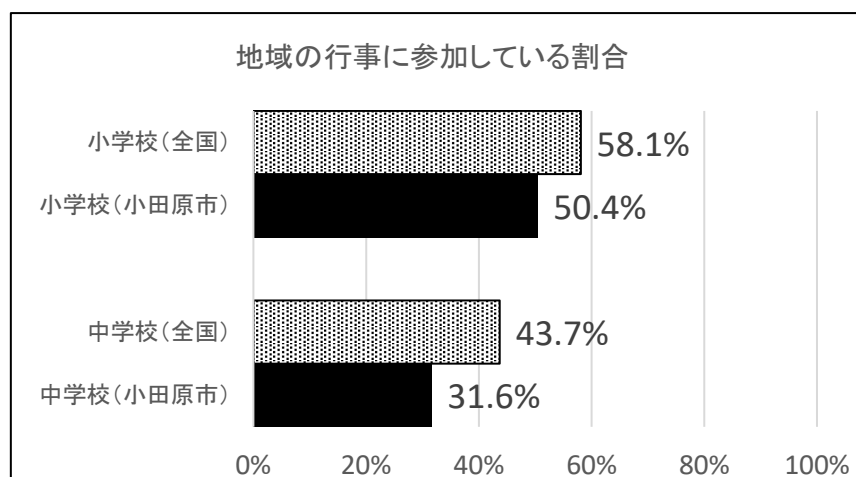
○小学校、中学校ともに「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会（学級活動）で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合



学級会（学級活動）で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると感じている児童生徒の割合は、小学校・中学校ともに全国平均を下回る結果だった。「互いのよさを生かして解決方法を決める」話し合いを行うことは、学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善につながる。児童生徒が互いに認め合い、温かい雰囲気の中で話し合いができるようにすることも大切である。

【質問紙６】「地域の行事に参加している」

○小学校、中学校ともに「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という設問で「当てはまる」と回答した児童生徒の割合



地域行事に参加している児童生徒の割合は全国平均、小田原市の結果ともに昨年度から低下している（小田原市小学校で5.9ポイント、中学校で8.8ポイント）。これには新型コロナウイルス感染症により、様々な地域行事等が中止となったことが影響していると考えられる。これからのグローバルな社会で多くの人と関わり活躍していくためには「社会力」の育成が大切であり、児童生徒を取り巻く学校・家庭・地域が、それぞれの立場でできるところから教育環境を整え、児童生徒の育ちを支えていくことが大切である。

